技術的無意識を乗り越えるために

亀山修一
論説委員
北海道科学大学・教授

NHK「連続テレビ小説」（朝ドラ）が大好きで、毎朝「ばけばけ」にくぎ付けになっている。少し前となるが、2023 年度下期の「ブギウギ」では、主人公の福来スズ子（モデルは笠置シズ子）が大阪松竹歌劇団（OSK）で「櫻咲く国」を歌って踊る場面がある。

櫻咲く国、櫻、櫻
花は西から 東から
ここも散り敷く アスファルト
櫻吹雪に 狂う足取り

著者は舗装工学を専門としているが、今から約 100 年前の曲の歌詞に「アスファルト」と言う単語があることに驚いた。この曲ができたのは 1923 年に発生した関東大震災による帝都復興事業の時期であり、東京の街路の舗装率は 1921 年の 9%から 1932 年には 82%まで急上昇した。黒色のアスファルト舗装の上にソメイヨシノの花びらが散って一面に白い絨毯を敷いたようになり、風が吹くと花びらが雪のように舞う光景はアスファルト舗装が現れるまで見たことがなかったのだろう。桜は日本のシンボルであり、世界各国から多くの観光客が桜を見るために来日する。アスファルト舗装の「お陰」でそれまでにはなかった桜、すなわち新しい日本の「美」が創出されたと言えるだろう。

この他にも見逃している舗装の「お陰」があるのではないかと考えていたところ、昔、恩師が「舗装は女性のファッションを変えた」と話されていたことを思い出した。そこで、「舗装」と「ファッション」のキーワードで検索したところ、明治大学の中川雄大先生が執筆されたコラム [1] に行きついた。その中では、帝都復興事業に伴うアスファルト舗装の普及によって、それまでは晴れの日には下駄、雨の日にはゴム長靴を履いていたのが、天気に関わらず靴を履くようになったと書かれている。

現在、天気を気にせずに革靴、ハイヒール、スニーカーなどを履き、それに合う服を選んでファッションを楽しむことができるのは、「舗装のお陰」と言える。この他、常に新鮮な野菜や魚介類がどこでも食べられること、晴れた日に風や車によって舞い上がる粉塵がなくなり眼病やじん肺の心配がなくなったこと、救急車の搬送時間が短縮されて救命率が上昇したことも「舗装のお陰」である。

人々の生活を支える重要な技術だが、普段の生活では私たちがその技術を素通りしてしまうことを、都市研究では『技術的無意識』と呼称する。舗装はインフラの中のインフラであるために、普段のくらしの中で「舗装のお陰」を意識することはなくなる。まさに、舗装は「技術的無意識」の典型である。

今、道路建設業界は若手人材の獲得に四苦八苦している。各社は CM、ホームページ、インターンシップなどを通じて情報発信しているが、それは自社の技術・品質・工事など道路建設業を志望している人たちに向けた情報である。道路建設の魅力と夢を広く一般の方に分かってもらうためには、「技術的無意識」と言う壁を乗り越えなければならない。これには福島高専の増戸洋幸准教授の研究 [2] が参考となる。この研究では、舗装が有する多面的な機能を「アフォーダンス」の視点から理論的に整理している。アフォーダンスとは、環境が人間に対して「何をさせうるか」という行動可能性を意味する。その結果、舗装は単に「道を提供する」だけでなく、移動のしやすさや安全性を伝え、熱・水・音などの環境快適性を調整し、地域文化や交流を支える基盤であることを示した。このように舗装の多面的な潜在価値を再発見し発信することで、人々は技術的無意識から目覚め、舗装が有する新たな可能性や魅力を感じる。

また、米国では、AI によってホワイトカラーの需要は減りつつあり、AI に仕事を奪われない現場職で富を築く「ブルーカラービリオネア」が注目されているらしい。日本ではビリオネアまでとはいかないが、「ホワイト to ブルー」の流れが加速すると言う予想もある。これを好機と捉え、土木技術者は、AI には奪うことができない、満足度と収入が高い専門職であることを効果的にアピールし、土木技術者の地位向上を図る必要がある。

参考文献

1）リレーコラム：アスファルトを歩く――社会現象としての道路の舗装（中川雄大）
2）増戸洋幸、中村博康、亀山修一：アフォーダンス理論による「舗装」の潜在的価値の再定義，土木学会論文集，Vol.81，No.21，2025.